

「先真文明時代への覚書」5. 文明の野蛮へ退行

木俣美樹男
(植物と人々の博物館)

Memoranda on “Prehistory for Real Civilization” 5. The Retrogression to Barbarity of Civilization

Mikio KIMATA
Plants and People Museum, INCH

いかなる国家においても、このような正直者の数に正確に比例して、
その国家がその存在を持続するし、
あるいは持続できることをたしかめたからである。

J. ラスキン (1862)

未来なぞクソ喰らえだ。それは人間を食い荒す邪神だよ。
制度には未来がある…しかし人々に未来なんかない。

人にあるのは希望だけだ。

I. イリイチ (1987)

1. はじめに

随筆として「先真文明時代への覚書」を書き始めたのは、大学を退職した頃であった(木俣2014)。その後の思索はシリーズとして、2 末世カリユグの先へ(2015.11)、3 便利に抗う復元力(2016.2)、および4 生き方、暮らしの経済(2017.2)を個人ホームページ【生き物の文明への黙示録】に掲載してきた。この随筆その5は文明の野蛮への退行に関して、さらに論考を進めようとするものである。

現代の野蛮について、アンリ(1987)が次のように述べている。

科学知が異常に発達した結果、その過程の終局には文化そのものの滅亡もありうる。恐ろしい野蛮が出現し、今日、人類を死に追い込もうとしているのである。本質的には美的である世界が、美の命じるところに従わなくなるのである。このような状況がまさに科学の野蛮である。今われわれの前にあるのは、実際、今まで誰も見たことがなかったことで

ある。科学の爆発と人間の破滅。現代科学は世界を、それと知らずに、奈落に突き落とすのである。これこそ新しい野蛮であり、その克服が可能かどうか、今度ばかりは定かではない。大学は、教育において知を伝達し、研究において知を増し加える本来の目的のために、野蛮が徐々に腐らせている社会全体と全面的に衝突し、永遠に戦うしかない。人類が地球上に現れたときから、不思議な認識が人類とともにあり、そのおかげで人類は生きながらえ、さらには諸文明と諸々の精神性を循環することができたのであるが、その認識の松明をまだ手放さないならば、われわれはなお、淵の端にあって、少なくとも光の最後のきらめきを淵の中に投げかけ、そこに在る、われわれにとっての脅威、深い断絶、崩壊を暴き出すことができる。

バベルの塔(The city and its tower)の物語では、人類はその名声を高めようとして、町と、天に達する塔を共同作業により煉瓦でつくった



図1 ブリュエゲル「バベルの塔」 オーストリア・ウィーン 美術史博物館

が、神はこれを人間の自己神化の試みとみて、以後作業のできないように言語を乱したという(山折監修 1991)。

しかし、解釈はいくつかあるようで、①一般には人類が塔をつくって神に挑戦しようとしたので、神は塔を崩したとの説、②人類は新技術を用いて天まで届く塔を作り、各地に散るのを免れようとしたので、神は降臨して言語を乱し、人類に異なる言語を話させるようにして、世界各地に散らばらせた、③人類の科学技術への過信を戒めるための物語である、などである。さらなる解釈は、④バベルの塔の完成形は人類の統合・統一、あるいは神と人との合一の象徴で、バベルの塔は崩れては再建する歴史を永遠に繰り返す(Wikipedia 2018.7)。まるで、現代科学の慢心に通ずる物語にも当てはまるように聞こえる。

ブリュエゲルの描いた「バベルの塔」はよく知られている(図1)。生命科学によるゲノム編集やiPS細胞の利用、情報科学によるAI(人工知能)、ビッグ・データの蓄積・利用、インターネット言語の画一化などは、現代のバベルの塔の建設が完成に近づいていることを暗示してお

り、生物文化多様性、伝統的知識体系や少数民族言語の消滅傾向も続いている。バベルの塔は崩れた後、繰り返し何度も作り直すのだそう。まるで「シーシュポスの神話」のようだが、バベルの塔は人間の営み、その積み重ねとしての文明のことではないのか。古代より幾多の文明が崩壊し、また新たな文明が興隆を繰り返してきたことを、暗喩しているのだろうか。

さらに、アンリは日本語版序文(1989、モンペリエ)において次のように述べている。

かつては、自然との直接的で、強く、深く、おそらく比類なく詩的な関係を生きていた国、さらには自然に対する、このまったく特別な感情につちかわれて、瞑想に身を委ね、他の国に例を見ないほど遠くまで瞑想した国。この国であればこそまた、ほかのどの国にもまして、自分が一体化に向かっているその危機を、強く感じとっているにちがいない。この国が、唯一われわれを救いようような徹底的な反省を開始する時が来たのではないか。

アンリは、ゴッホ(1872-1890)が弟テオへの手紙に書いてくれたと同じように、自然に寄り

添って生きてきた、このくに日本の人々に深い信頼を寄せてくれている。私たちはその想いに応えなければなるまい。ラスキン、ゴッホ、アンリ、イリイチらに、私は共感し、素のままの美しい暮らしを求めて、現代を生き物の文明に向かう先真文明の時代と位置づけることにしたのである。この間、国内外の先達たちの沢山の著述を読んできたが、同様の考えを述べている先達は少数ながら存在していた。国内外の先達に励まされながら、心意を強くしてさらに思索を進めたい。

2. 人間の未来について 50 年前に考えた

私が大学生になったのは 50 年前の 1968 年である。この 1 年には世界中で現代史上の重要な出来事が相次いで起こった。たとえば、日本では東大医学部無期限ストライキ突入、東大闘争始まる。成田空港阻止三里塚闘争集会。国際反戦デーで新宿駅を学生が占拠。大気汚染防止法、騒音規制法施行。イタイイタイ病を公害病に認定、カネミ油症事件。東京都府中市で三億円強奪事件発生。小笠原諸島の日本復帰。札幌医科大学で日本初の心臓移植、などである。

アジア、中国では、文化大革命上山下郷運動。韓国、青瓦台襲撃未遂事件。北朝鮮、プエブロ号事件。ベトナム戦争でのソンミ村虐殺事件、テト攻勢。アメリカ関係では、米空軍機 B52 がグリーンランド沖に墜落、水爆 4 個が行方不明。マーティン・ルーサー・キング暗殺。アメリカの有人宇宙船アポロ 7 号打ち上げ。ヨーロッパでは、フランスで 1,000 万人が参加したと言われるゼネラル・ストライキが発生。学生の街頭占拠と労働者のストライキが 1 か月に渡って続発した五月革命。フランス、サハラ砂漠にて水爆実験。プラハの春始まる、ワルシャワ会談。ワルシャワ条約機構軍がチェコスロヴァキアに軍事介入（チェコ事件）、などである。

私が戸惑いながらも大学闘争の渦中に巻き込まれてから、すでに 50 年が経過したので、そろそろ当事者としての反省をせねばなるまい。まず、理学部生物学専攻生だった時に書いた拙稿「農業と人口」（木俣 1970）および「生物科

学と思想性」（山口晶 1971、筆名）について再検討してみる。原文は【生き物の文明への黙示録】のエッセイ（<http://www.milletimplic.net/essay/futurehuman.pdf>）に転記した。おおよそ 50 年前の記述であるが、今に通ずる課題についていくつか指摘していた。

世界に余剰農産物があるのに、多くの国で飢えに苦しむ人々がいる。1970 年 7 月に人口は 36 億 3,200 万人を越え（国連統計）、現在 2018 年 6 月 14 日では 74 億 7,425 万人を越えている。緑の革命以降、一層、商品作物がモノカルチャーで生産され、化学肥料や農薬、エネルギーなど多投下農業で、種子も含めて、グローバル・コングロマリットに支配されるように進行している。自然生態系が単純な人工生態系に置き換えられ、生物多様性も、少数民族言語などに顕著に見られる文化多様性も著しく衰退している。

公害は無くなったのではなく、今でも大気・水質や土壌の汚染は拡大している。化学物質（農薬、医薬、食品添加物）などの汚染は減少してもいない。これらに加えて、新たに放射性物質の汚染が拡大している。遺伝子組み換え生物の実用拡大も、すでに社会問題を引き起こしている。歴史状況が変わっても、生活空間の状況が改善されておらず、むしろ悪化しているこの 50 年とはそれだけの時間だったのだろうか。

テイラー（1968）が発した生物革命の暗雲はすぐそこまで押し寄せ、今までの規範を大きく揺さぶり、打ちこわし、人間の存在そのものを否定し、人間を滅ぼしさえする方向に向かっている。安閑と人類の英知を信じていてよいのか、あるいは人類の滅亡も自然理なのか。人工生態系としての人間社会と、自然生態系との激しい衝突は、自然科学を止揚して一つの哲学の中に統合させざるを得なくなるだろう。生物学における「生命とは、人間とは何か」の問いは哲学における根本命題として統合される。この統合において生物学者は重要な任務を果たさねばならない。事実を事実として記載するのみでなく、事実のもつ重みを自ら考え、また、それを大衆的に明らかにせねばならない。

私は50年前にこのように書いていた。1970年に直観していた学問の統合への視点は、現在の環境学や環境学習原論の思考につながっているようだ。また、「生物学と思想性」(山口1971、木俣筆名)においては、分子生物学者の渡辺格さんの講義を受けて、層的自然観と科学の階層性について考察し、これを弁証法的唯物論の自然観としていた。当時20歳そこそこの科学者の卵であった私が弁証法的唯物論^{注1)}など理解していたとは思えないので、ちょっと背伸びして流行語を使ってみただけだったのだろう。次に要点を再録する。

巨大科学の中の個別科学として細分化を強いられ、偏狭な専門にのみとじこもり、巨大科学の前に茫然自失し、経験主義・実証主義に陥り、科学は人間性とは別のものとして、戦争や公害の元凶とさせた。生物科学の上層の人文社会科学として研究されている人間社会に生物学革命が飛躍的な、今までにない複雑な変革かまたは、人間の滅亡を要求し始めているからである。その後、テイラーが発した生物革命への警告はまともに聞き入れられもせずに、今日では重大な社会問題になっている。

純粹科学者は、科学は人間の欲求に基づいており、科学のための科学こそ至上の価値があるという。科学はすべてのものから遊離した存在であり、何ものからも自由であり、公正中立であり、唯一の信ずるに値する真実であると、宗教的な神への信仰に近いものをもつのである。そして人間性の一発現としての科学が人間性を失うのである。近代から現代への科学の歴史は、戦争の歴史とともにあり、戦争によって科学が発展するのだと、戦争を科学のために都合のよいものという人々まで出るようになった。原子爆弾を研究することの思想性は、明らかに資本主義の論理・思想の下にあることを認めながらも、科学者が悪いのではなく、原子爆弾をつくった技術者やそれを使った人間が悪いのだというのはまったくの欺瞞ではないか。現代科学の思想的背景にあるのは科学技術という万能の神に対す

る信仰であり、これは資本主義の発展のなかで形成されたものである。

テイラーが言っているように、人間から出た科学が、今や巨大な怪物として現れてきている。彼は、その恐怖の生物学革命が引き起こすであろう、あらゆる事件により人間が滅亡するとの予感に対して、唯一ヒューマニズムという言葉にしか自分の立場を置けなかった。科学は人間性を増々抑圧して、ゆきつくところは人間がすべてを知り、すべてをなせるようになった時に、人間は滅びるといふ、自らつくった科学が自らを殺すというところである。科学者のいくらか良心的な人々には、このことの虚無感がしのびよっている。科学の状況に対し、その信仰の幻想と虚無(自閉)に対し、大衆^{注2)}は不信をいだき始めている。

羽仁五郎(1968)が言うように、新しい科学はアウシュビッツの総括より出発すべきである。大衆を苦しめる科学、人間性の正当な発現を抑える科学に対して、人間性を解放する科学、人間の復興を求める思想・哲学に裏づけられた新しい科学を求めているのである。中国での大学闘争は非常にラディカルに展開され、今では大学は労農兵にも門戸を開き、新しい大学制度の下に、教育・科学研究・生産の結合の試みがなされている。労働者大衆こそ新しい科学を支える力であり、また担い手である。宇井純(1971)が日本の反公害住民運動の中に見ようとしたほのかな希望の光は、ここに至って輝くだろう。大衆は無知無能ではないし、大衆の手によってこそ新しい科学が発展するのだ。

この頃の私は、大学闘争の暴力的な現実を見て学生運動に失望する一方で、大衆による非暴

注1：弁証法的唯物論：1840年代にマルクスが提唱し、エンゲルス、ついでレーニンらが発展させた理論。従来の唯物論が機械的であったのに対して弁証法的、ヘーゲルの弁証法が観念論的であったのに対して唯物論的であることを特質とする。根本原理としての物質的存在の優位とそれの弁証法的運動、人間的実践を媒介とするこの運動の模写としての認識を説く(広辞苑)。

注2：大衆とは民衆、特に、労働者・農民などの一般勤労階級。

力・不服従志向の「ベトナムに平和を市民連合（ベ平連）」や反公害運動に共感するなかで、大衆の参加による新たな科学になんとか希望を見いだそうとしていたようだ。しかし、中国の紅衛兵の評価は、歴史的背景とその結果を知るにつけ、今にして考えれば、あまりにもひどい錯誤であった。文化大革命の実態は、大躍進政策に失敗した毛沢東が復権を画策し、紅衛兵と呼ばれた少年少女を扇動して政敵を攻撃させる、中国共産党の権力闘争であった。マルクス主義に基づいて宗教が徹底的に否定され、教会や寺院・宗教的な文化財が破壊され、特にチベットでは仏像が溶かされたり僧侶が投獄・殺害され、その犠牲者数は数100万人から1,000万人以上ともいわれている。さらに、大躍進政策による餓死者数は3,635万人であったという^{注3)}。

こうしてみると、科学者による純粋科学を大衆先導の応用科学に変化させるべきだと言っていた。しかし、大衆とは何か、一般的に言えば所詮、自覚する個人ではなく、無知で無恥な烏合の集団ではなかったのか。決して上から目線で言っているのではない。

私は50年来、何百人という農耕民に田畑や農家で直接個別にインタビューをしてきた。自律して暮らす尊敬すべき、大勢の農耕民や都市民に国内外で出会った。大衆という不特定多数の集団概念で、その様態を見てはいけなかったのだと深く反省したい。個別に、個人的に直接出会った実態のある人々を尊敬すべきであったのだ。教養ある人々は少なからずの割合で存在するが、学びを忌避し、思考停止する大衆はあまりに多数いるのだ。

学生の頃、中国の文化大革命・毛沢東思想や北朝鮮のチュチェ思想^{注4)}は素晴らしいと賛美していたが、その後、隠されていた歴史事実を知るにつけて、無知ゆえに騙されていたのだと気づいた。これらの思想の下では、あまりに人々の命が軽く、自由・平等・友愛の近現代精神原理に大きく外れていた。いくつかの国々を旅して、現実の社会主義・共産主義は資本主義と何ら変わることなく金権から外れていなかったことを知った。この50年で、多くのことが

白日の下に晒されて、それでもなお、失政で何百万、何千万の人々を死に追いやった権力者の巨大な肖像画は大街路に飾られ、醜い権力は続いており、不幸な人々が多い世界の現実が残念だ。大衆という集団概念はポピュリズム（大衆迎合主義）そのものだ。

一方で、アジア・太平洋戦争時の日本軍の実態を描いた吉田（2017）の著作を読んでみた。次に一部を引用する。

1940年から1945年にかけて、日本軍は、満州国はもちろん、アリューシャン、ハワイ、オーストラリア、インドにまで戦域を拡大した。日中戦争以降の軍人・軍属の戦没者は約230万人（朝鮮と台湾の軍人・軍属戦没者は5万人）、このうち広義の餓死者は140万人（61%）、海没死35万8,000人、日本の民間人の死者は約80万人、うち国内戦災死没者は約50万人。日本軍による略奪、虐殺、まきこまれたアジアの戦災死没者1,900万人以上。中国人に対する蔑視、刺突という残虐行為による訓練、古参兵による暴力的いじめ。恐怖・疲労・罪悪感から軍人・軍属の自殺者が多く、10万人に対して30人強で、世界の軍隊で1位であった。軍医・衛生兵は傷病兵に自殺を強い、または殺害処置した。

こうしてみると、日本軍がいかにか特異・非道な軍事思想の下で、徴兵された兵士に凄惨な体験を強いたのか明らかである。国家間および国内権力者間の覇権争いで、このような生き地獄によって、人口を制御されるいわれはない。状況は異なっているとしても、何千万人を越える犠牲を強いられた戦争や飢餓の歴史を繰り返さないことだ。

他面で、アメリカ軍は太平洋戦争末期に、日本の都市を絨毯爆撃、原子爆弾投下により、一

注3：大躍進政策の失敗にともなう大飢饉の死者数は、国家統計局データを基にすると4,770万人で、地方誌や地方の統計を集計すると5,318万人。楊氏の現地調査などでは不正常な死に方（餓死者）は3,600万人であった（Wikipedia）。

注4：チュチェ（主体）思想は金日成の信念、人間が全てのことの主人であり全てを決める、を基礎としている。

般市民数十万人を不必要に殺した。敗戦したといえども、この国はどうしてこの非道なアメリカ軍の所業を黙認したのか。この絶望的な殺人所業は現在でも世界で続いていることを、忘れず、かつ知っておくことである。宇沢・内橋(2009)は、1945年の東京大空襲から広島・長崎への原爆投下に至る人類最大の犯罪の背景について、次のように解説している。

この市場原理主義的な Kill-Ratio はマクナマラ [注: ベトナム戦争時のアメリカの国防長官] が最初に考え出して、日本攻略に際して最も効果的に使われたものです。限られた航空力を最も効率的に使って、日本の都市を絨毯爆撃して、徹底的に破壊し、できるだけ数多くの家を燃やし、できるだけ数多くの人間を殺すことを日本爆撃の目的に掲げたのです。アメリカの自動車産業に日本を褒美として差し出すために道路をつくる目的で、徹底的に日本の町を爆撃して燃やしてしまったのです。木造家屋が燃えやすいような焼夷弾をわざわざ開発して。その後自動車が普及するように広い道路をつくり、その自動車も、最初は、日本では生産できないように規制を設けた。そして、日本人の考え方、生き方を、アメリカの製品・産業に順応する形につくり変えるという徹底的な教育をしたわけです。日本人の体格が貧弱なのは魚を食うからだとか、米を食べると頭が悪くなるといった類の言説。パンを食べろというのは実はアメリカの余剰農産物を消化させる意図で、非常にきめ細かい占領政策を展開した。

アジア地域への侵略に対して、日本は贖罪せねばならない。しかし、アメリカ軍の所業、ソ連軍の所業を忘れ、戦争犯罪だから仕方がないと言って許すこともない。朝鮮半島がアメリカ軍の撤退も含めて、非核化され、朝鮮族が統一されることは良いことだ。しかし、自国民・少数民族への人権蹂躪、市民拉致など、国権力が人権を踏みにじっている政治体制には不服従・非協力だ。アメリカ軍が朝鮮半島や日本からも撤退するのなら、その過程で日本は自立して専守自衛の論議を広く行い、主体である市民レベ

ルでも自衛体制の準備を議論する必要がある。

論考を生物学革命に戻そう。50年前に出版された『人間に未来はあるか—爆発寸前の生物学』(G.R. テイラー 1968) を再読してみた。気になる点を次に要約する。

かつては天然物としてしか手にはいらなかった物質を、今日では科学操作によって、商業的な規模で人工的に作ることができるようになったし、天然には存在しなかったものまで作り出すことができる。現在直面している問題の一部は、生物学的な知識の爆発的な膨張によって必要となってきた社会的な意思決定を、広く受け入れるような制度をつくり出さねばならないことである。われわれは自由の代価として意思決定を強いられる。機械革命は一般の人間にも新しい自由をもたらした。新しい人口移動が生じ、都市への流動を早め、そこで多くの社会問題を新しく生み出してきた。生物学革命も似たような結果を起こすであろう。生物学研究にある種の制限を課すべきかどうかは単なる学問的な問題ではない。生物学革新の速度が非常に速いと、西洋文明あるいは世界文化を破壊してしまうだろうし、思慮深く規制しないと、そこから混乱した、不幸な、非生産的な社会がつくり出されてしまう。研究の範囲と方向を規制するか、研究は自由にしてその結果を凍結し、必要に応じて取り出すか、実際にはこの2方法を組み合わせる必要がある。

しかし、大衆は、問題が自分の玄関先でどしんと落とされ、大きな音を立てない限り、多くの奇妙な生物学の発展に対処して、前もって準備し始めることはないという結論を、残念ながら下さざるを得ない。社会が新しい技術を受け入れる準備が整うまで、凍結しておく生物学的アイス・ボックスが必要であろう。

社会の混乱には個人の混乱が強く結びつく。努力がはっきり結果に結びつかないような世界、良心ある人が不正で報いられ、利己的な人が望む物を手に入れるような世界、あるいは結果は単に偶然なものではないと

いった世界では、人間は努力する情熱を失ってしまう。今日、社会にはすでに個人的ニヒリズムの兆候が見られる。それは冷笑主義、物質主義、少ない利益でもよいから早く手に入れることを好む風潮などに現れている。

大衆が科学に背を向ける日が近づきつつある。科学者は現代がどういう時代であるかさえも知らない。自分の理論を検証するためには地球を軌道から外し、太陽を消し去ることさえ辞さない、間違いじみた技術者であるというのである。ある社会のもついろいろの特色はすべて相互につながり合われているのであり、その一つを他から切り離して無関係に変えることはできない。環境のいろいろな特徴を、どの程度まで犠牲に供しても良いのかということが問題になっている。われわれが忙しく働いてその結果、独りかくれて自由な生活に浸り、のんびり働いたり、自然と接し、あるいは愉快地に仕事をするなどという楽しみを我々から遠ざけ、物を消費することだけを増々容易にするような世界をつくり出しているわけである。

いろいろの社会は皆、人間からできている。いろいろ違った種類の人間は、違った種類の社会をつくって気持ちよく暮らしている。われわれの問題の根源は、満足というものを測る手段が欠けているということである。われわれは、経済的に計算された生活水準が満足の物差となっていると仮定する傾向がある。現在、世界は手押車で地獄に向かおうとしているような印象を与えるが、実際、そうなるのかもしれない。

情緒が知識のように蓄積されると考えるのは無意味であるし、次世代に手渡すことのできる、受け売りできるような情緒の手段などというものはないからである。文化と人格との間の関係の理解が深まるにつれて、われわれは社会全体を、利己主義と他人に対する攻撃という方向から、協力と社会的良心という方向に転じていけると、信じてても良い様な理由が少なくとも少しはあるからである。根本的な解答は、賢い人々の仕事を読むことに



図2 ヨハネ Joannes ハンガリー・ブダペスト 聖イシュトバン大聖堂

IL GIUDIZIO UNIVERSALE THE LAST JUDGEMENT



図3 ミケランジェロ (1535～41)「最後の審判」
イタリア・バチカン システィーナ礼拝堂
(原画は撮影禁止で、これは解説ポスター)

よって得られる。人間は万物の尺度である。博愛心によって誤りを正されないような知識は、毒液や悪の性質をもつに至る。われわれに欠けているのは、これらの原理を実行に移す実際のやり方である。

さらに、テイラー (1970)『続・人間に未来はあるか—最後の審判』も再読して、同じく気になる点を次に要約する。彼は、序のかわりに、ヨハネ黙示録7・8・9章を引用している。ヨハネ (図2) はイエスの十二使徒の1人で、神の啓示を受けて黙示録を書いたとされている。ま

た、テイラーは表紙にミケランジェロが描いた「最後の審判」(図3)の一部を用いている。

飢餓と伝染病と戦争は、古くからの人口調節弁であった。もう一つの奥の手は、人が寄り集ったがゆえに、ストレス病によって能力と生殖力を蝕まれて死に始めるとき、すでにそれは起こり始めている。時は敵なり。問題は「許された時間内で対処できるか」である。もう手遅れなのか？ 人間ほか生き物の人口 population 爆発 {注：人間は出版当時の倍、74億人になっている}、大気・水質への農薬・重金属・放射性物質・食品添加物などの汚染、著しい気候変動、エネルギー問題、食料安全保障問題など、課題は増えるばかりで山積している。

これから人間が他の自然とどのように共生していくべきかという問題が生まれてくる。教育は今日、その真の機能—国民の一人一人が自分の望むような人生を送れるように手伝う—に関して、500年前ほども関心を持たれていない。A.D.サハロフ(ソ連の水爆の父)は、文明が核戦争、飢餓、退廃した大衆文化、官僚的ドグマの脅威によって危機に瀕していると論じた。飢餓と人口課題の問題の重大さを指摘したが、世界中から寄せられたのは沈黙だけであった。A. モーロアは、人口の過大になった地球は、知的でない世代をつくりだす。文化は余暇と静寂を要求するが、それは失われているからだ、と警告している。

現存のあらゆる組織は一掃されるべきだという現代 {注：1970年頃} の大学生たちの信念を裏づけているものは、実にこの可能性(たとえば、ロールスロイス社は良い車を少数生産することで満足を得る)に対する直観的な認識であると、私は信じている。工業社会は自己破壊的な過程に陥っている。満足を与えることができると信じ切って、不満を生み出すような手段をつかって、大量の品物をつくり出している。使うために生産するのではなく、生産するために使う破目に陥っているのだ。政府が環境問題に有効な行動を起こすことのできない理由は、政府も、政府が代表

する国民もこのような抜本的な再編成の必要性を認識していなかったり、受け入れていないからである。政府や国民のこのような怠慢こそ、まさに多くの学生が現在の社会を破壊しようとする理由となっているのだ。

広く言えば合理主義が、特に科学が宗教に代わった。宗教を人間の生活に目的を与える神話と定義したいというなら、科学は宗教であった。人間が環境をつくりかえる無限の能力を持っているという共産主義者の信念は、18世紀に特筆された改良家の楽観論にすぎなかった。今日、宗教的な信念は、科学者の間ではもちろんのこと、さらに衰えているが、一面、人間の無力感、虚無感も一層強くなっている。だが、{注：汚染物質に抗議する人} その同じ人たちが、今後自分が訪れる当てもないような渓谷がダムにされるとか、ある種の動物や植物が絶滅に瀕しているとか、前技術時代の人間文化が破壊されつつあるのを聞いても、全く何の感動も起こさないであろう。

自然への愛が、それを体験する人々に特に重要な純粋な宗教的体験であるということが事実なら、われわれが合理主義者の見解をとって、宗教的な要素を拒否したとしても、価値と重要性についての体験は残っている。これこそ、人間がなぜ自然への愛を守ろうとする試みにそんなに深くかかわり合うようになるのかの理由であり、それを人間から奪うことは正しくもなければ賢明でもない。それは明らかに高尚な経験であって、われわれにはあまりないものだからであり、おそらく現代生活のストレスを耐えていくのを助けてくれるからである。人間の多数が都市に住むような世界では、自然はもっと必要とされるであろう。

原始時代の物活論 {注：アニミズム} は、植物や生命をもっていない物もある意味で自分と同じものと見なくてはならないという感情を表している。近代の合理主義は、この感情をむしばんでいる。このように技術社会はその道を逆行させることも、このような感情を認めようとしないうに見える。将来の

いつの日にか、自然との関係をもどそうという広範な要求が起こるだろう。それまでに自然を壊してしまっていたら、われわれは許すべからざる罪を犯したことになるであろう。

テイラーが結語で言いたかったのは、科学研究の成果を技術として用いる前に、その範囲を充分明確にする必要があり、技術的に実現された過剰な利便性、個人的なニヒリズム、拡大した自由への責任については、経験・思索の詰まった古典的な著作が、その原理と実践の方法を示唆し得る、ということであろう。この著述がなされてから50年を経たが、人間の欲望は果てしなく広がり、課題解決は五里霧中である。

さらに、生命科学や情報工学は技術的に発達し、人工知能 AI から無人兵器・自動運転車など、人間の職業の多くが機械に代替されるようになるという。極地戦争では無人機によって無慈悲大量に兵士も市民も殺害され、日々の暮らしもカメラで監視され、AIの支配に服するのだろうか。オーウェルの描いた1984年以上の息苦しい未来が来るのなら、テイラーが言ったように、その来る未来を、人間に未来があるというのだろうか。これほどまでに踏み迷っているのなら、私たちは欲望を制御し、教養ある別の道を探る必要があるのではないか。

3. 失われる未来に残る希望

この課題を深めるために、次にイリイチの思索から、特に、自由、任意、無償性について学びたい。イリイチの発想の全体的理解は、私には難しいが、イリイチに最後のラジオ・インタビューを行ったD.ケイリーがその著書序論でそれをかみ砕いていて(カナダ放送協会1988)、大いに理解の助けになった。C.テイラーは序文で次のように記している。

我々の現代の状況を、墮落したキリスト教から出た副産物とするイリイチの理解は、現代という時代をもたらした歴史的なベクトルの重要な一つを捉え、いかに善と悪がその中で緊密に織り交ぜられているかを見せてくれる。われわれの文明は、苦しみを和らげ、人間の福祉を増進することに深い関心を抱く

文明であると同時に、われわれを異星人めいた非人間的な存在へと変化させる諸々の形式の牢獄に閉じ込めようと脅かす文明である。

ケイリーはまえがきで、冬の日本でのインタビュー(1986-1987)で、あるべき未来について尋ねられて、イリイチは次のように答えていると記している。

未来などクソ喰らえだ。それは人間を喰い荒す邪神だよ。制度には未来がある。しかし人々には未来なんかない。人にあるのは希望だけだ、と答えたそうだ。われわれが生きている無限の経済成長のユートピアの未来を、早晚やってくるカタストロフィー以外の何かとして思い描く人は、正気の人間の間には一人もいない。未来は邪神として、天がわれわれの上に開くかもしれない唯一の瞬間、すなわち現在を喰い荒している。期待は明日を無理強いする。希望は現在を押し広げて、未来を作る。未来の北方に。

ケイリーは序論でイリイチの思想を要約して、少し長いが次のように解説している。

学校化のための制度のもつ、驚くほど教会に似た性格と、学校化の主張とその実際の結果との間の奇妙な不一致、学校化は社会的平等を生み出すためだというのが、正反対の結果を生む(『脱学校の社会』1971)。また、開発はサブシステム(地域が有する環境に適合した自存自立の生活)に対する戦争であり、決して終わることのない消費の行われる地上の楽園への展望を切り開くものだ。しかし、開発は決して埋めることのできないニーズを生み出し、決して提供されることのないサービスの要求を生み出すことで終わる。同時に、開発に付属する魔力は、サブシステムの尊厳を奪い、自ら足るを知る生活の追及を不可能にする。

学校は落伍者の生産システムであり、単に大多数が成功できないということだけでなく、達成できない人々が自らを恥じるようにさせられる。学校が立身出世の登竜門とされるや、単に貧しいだけであった人々が中途落伍者という不利益をこうむり、劣等感を抱く。

学習に値することは教育に拠らねばならないという幻想を助長する。学校化は世界的な広がりを持つに至った宗教であり、そのサービス業務と行政機関が、救済のための唯一の通路であると主張した最初の制度、すなわちローマ・カトリック教会の末路であることが証明される宗教そのものである。(イリイチは) 職を得、社会的地位を獲得するための唯一の方法としての学校化に反対したのであって、学校が学習を組織する上で、合理的で実践的であることは認識していた。

自動車の量は移動性を窒息させ、読書の困難は教育経費に沿って増大し、医療はそれを治癒するのと同じ位多くの病気をつくり出す。制度的技術的成長が度を過ぎれば、自分の言葉で話し、驚き、自己の死を死ぬという、人間のもっとも基本的な能力を植民地化し、影で覆ってしまうことである。サービスの成長よりは自由の拡大を社会進歩の判断基準にしたいと願ったのである。健康の収奪である医原病は、医学的ヘゲモニーがいかに患者の、自ら治り、苦しみに耐え、死ぬ勇気と能力を破壊することで、畸形化する。野放しの医学的治療は、苦しみと死からその意味を奪い去り、かつ人々が尊厳をもってそれらと直面した文化的伝統の土台を掘り崩す。

破壊の道具は不可避免的に、統制や依存や収奪や不能を増大させ、富者だけではなく貧者からも自立共生を奪わずにおかない。この自立共生こそ、多くのいわゆる低開発地域の基本的な財宝なのである。ヴァナキュラーとは、なんであれ、家で育てられたり、家で織られたり、家で成長したもの、家で作ったものに関係していた。人々の日常の必要を満足させられるような自立的で、市場に関係のない行為である。

善とは、ある与えられた環境の中で他に比較しえないユニークな形で場に適合するものことである。それは一定の規模を守り、ある均衡を表す。また、フィットし、感覚はこのフィット感を認識し、また調子が狂っているものを認識する。

他方、価値とはそれに適正にフィットする場もなければ、もって生まれた固有の制限のない世界通貨である。価値はすべてのものを、その有用性と相対的稀少性で、ランク分けする。価値は、あるべき均衡の感覚を掘り崩し、経済的算術で置換するのだ。善いものは常に善い。価値は、それが競争相手の価値を凌ぐ時にのみ意味をなす。

書物はこの時代(1980年代)の根本メタファーであることをやめた。スクリーンが取って代わったのだ。人々はますますヴァーチャルな、あるいは非・場所的空間で時間を過ごすようになっていく。倫理とは、エートス、つまりある場所におけるある民族の精神を表現する行動原理であった。

現代西欧社会は、いかなる意味においてもポスト・キリスト教とはいえず、むしろキリスト教の倒錯した形態を構成している。現代的観念の全体的配置は大部分、その双肩に国家がかかっている「市民」から始まって、国家の存在理由であるサービスに至るまで、まともな人々が守りたいと願っているこの宇宙惑星的「生命」から、それを脅かすテクノロジーに至るまですべて、キリスト教というオリジナルの歪曲である。〈聖ヒエロニムスからの引用〉裸のキリストに裸で従う。

西欧社会の道具化の増大する鞏固化と手を取り合って、人が伝統的に無償 *gratuity* と呼んでいたものに対する心遣いの欠落が進行した。現代の一つの相は無償性の喪失である。啓蒙主義と共に、哲学者は概して善の追求としての倫理やモラルについて語ることを止め、その代わりに徐々に価値評価できるものについて語るようになっていく。近代の終わりにあって、どこか目的追及的なところがなくても、善であり、美であるような行為を想像することはとても難しくなった。私はこの世界で、自分が愛する人々と共に生きること以上に素晴らしい状況があるとは思えない。

現代をポスト・キリスト教の時代と呼ぶのを拒み、それを黙示録的なのだと主張したの

は、アクイナス^{注5)}の弟子志願の人間としてであり、信をもって知を求め、知をもって信を求める。ベツレヘム^{注6)}以後の全時代は定義からして黙示録的であるが、現代の語法ではアポカリプス (apocalypse 黙示) という言葉は何か大惨事のようなものを意味するが、私にとってそれは覆いを取り去ることであり、ヴェールを剥ぐことだ。最善の墮落は最悪であるという仮説を扱っている、ということだ。

さて、私はイリイチの仮説に賛意をもった。期せずしてイリイチと同じ思考のもとに、私はこの時代に絶望し、言葉を失ったので、『生き物の文明への黙示録 implication』を書くことにしたのだが、私はキリスト教徒ではないので、新約聖書のアポカリプスの意 (啓示 revelation) の用語を用いないことにした。私の意図がイリイチの思索で、改めて明確にされ、共感を得たように思う。

カラヴァッジョ (1606-07) が描いた「ロザリオの聖母」(図4)をよく見ると、聖母子に敬愛の視線を注ぐ人はおらず、彼女が与えたロザリオをもつ修道士に慈悲を乞う視線が注がれており、信仰のあり様が問われていると、マスター・ガイド (日本人) は彼女なりの鑑賞解釈で説明していた。先学からの教えはありがたいが、それを参照しつつも、やはり自らが直接、本質、原点・原典にあたり、学ぶべきだと考える。イリイチが、現代的観念の全体的布置は大部分がキリスト教というオリジナルの歪曲であるので、裸のキリストに裸で従う、と言っている意味は修道士にではなく、聖母子に従いたいという態度と受け取れる。これを信仰の個人主義と理解したい。

4. 商業主義の蔓延

イリイチが言うように、何もかもが商品として金銭的評価で価値づけされる。真なる行動規範原理、善なる社会的無償行為、美を探究する芸術作品なども、すべてが商品化されてしまい、価格が付けられる。金もうけにならない行為は意味をもたず、何もかもが、人の心情までもが



図4 カラヴァッジョ「ロザリオの聖母」 オーストリア・ウィーン 美術史博物館

欲得の売り物で、大衆社会一般がそう信じるように、学校は教育しているようだ。

個人や家族が自ら野良で食べ物を作る、生活用品や趣味の作品を創る、生業 subsistence、売らない仕事、そうした自由な楽しみ、望みを金銭価格が奪い、阻害する。素のままの美しい暮らし Sobibo は自然 (じねん) で、真 (ありのまま) の善き生活である (木俣 2015)。人間にとって、最も大切なのは身も心も自由であることだ。他の生き物の暮らしにとっても、きつと自由がいちばん大切なものだ。

商業主義の対極にある農業から、現代文明を見直してみよう。内田ら (2018) は、農業について次のように論じている。

(内田) 農業の存在理由は人間を飢えから守ることです。供給量があるレベルを割った瞬間に農作物は商品ではなくなります。それが

注5: トマス・アクイナスは13世紀の教会博士、『神学大全』等の著者。

注6: イエス・キリストの生誕の地。

ないと死ぬというものになる。農業を営利事業にした場合には、確実に商品作物のモノカルチャーになります。費用対効果が一番高いからです。食料安全保障の面から言うと、そういう仕組みが最も飢餓に対する耐性が弱い。いつの時代でも、シンプルでわかりやすいストーリーを好む人たちが主流派を形成します。(しかし、)多様なものが混在している社会しか危機的状況を生き延びられないからです。東京は危機体制のきわめて脆弱な首都なのです。あらゆる資源の東京一極集中を進めている。東京五輪なんか、全く必要のないイベントですけれども、そういうお祭り騒ぎに桁外れの国費を投じている。福島原発事故では、首都機能が喪失する寸前までいったのです。日本だけが何も考えていない。国が人口減についても、シンギュラリティ {注：技術的特異点} がもたらす大量失業についても、何も考えていない。政官財メディア、誰も先の事は何も考えていないことが次第にわかってきたので、若い人は自力で生き延びるために地方移住を始めたわけです。農業というのは相対的にはかなり安定した仕事だということがわかります。収益はあまり期待できないけれど、食べることはできる。自分自身の技術は蓄積して年々高まり、農業労働者として熟練熟達することは実感できる。そういう手応えがあって、しかも周りに感謝されるという仕事って、なかなかありません。

(藤山) 自分たちがいかに手間暇かけて自然からものを取り出して、日々の美しい暮らしを作っているのか、そういった営み、頑張りというものをどれだけ記憶として受け継いでいるか。住んでいる人たちがその価値を再認識して、それを子供に教育としてちゃんと伝えていくことが大切です。

(宇根) 天地有情の中での仕事の心地よさとか、嬉しさというものが、知らないうちに自分を支えてくれているわけです。百姓という呼び名は、かなり誇り高い言葉だったのです。百姓仕事の場合は、仕事への没頭から醒めて見渡す世界は、天地自然の中です。百

姓仕事を天地自然との協働だととらえるのが農本主義者の特徴です。百姓自身が、資本主義としっかり対峙してこなかったのだと、私は思います。社会の進歩、効率化、所得が増えること、便利になることがいいことなんだ、ということは、農の本質と矛盾するのではないかと考える思想が決定的に不足していたと思います。食べ物は天地の恵みだという感覚を取り戻す思想を百姓が語らないなら、誰が語るのでしょうか。人間は資本主義の価値観だけで生きているのではないことを、百姓は天地有情の世界で示していく、そういう時代がそこまで来ています。

これまでに数多くの心ある百姓や学者たちが多くのことを語り、良い未来について提案してきたが、大多数の人々はそれを聞こうとしなかった。三猿を決め込んで、欲望に踊り続けており、多くの人間は自ら救われようがない。しかし、ムラ社会に深くかかわろうとしない評論家的研究者は、田園回帰・自然志向を賛美するが、現実の厳しさ・醜悪さについては知らないふりをして、あるいは、現場を知らないので、事実についての発言が少ない。

私が受験生の頃、岐阜羽島にある祖父の田舎で、例年通り夏の1週間を過ごした。ここは木曾三川の流れる濃尾平野の水田地帯だ。朝早く散歩に出て田圃を歩いていると、昼には「あの若い男は誰か」とうわさが飛んだ。こうした村の監視されているような狭さが嫌だった。

その後6年ほどして、私は東京で職を得て、関東山地を中心に山村調査を始めた。40余年、山村に通い続けて、何百人もの村人と田畑や茶の間で語り合ってきた。それでも、大方の村人は、私を「旅の人」としか見ていなかった。とりわけ村役場や有力者はあえて無視、黙殺してきた。このような対応に関しては、同様の地道な自然学校をしている団体からも何例か聞いたことがある。私たちが村で孤立していたのではなく、村人こそが深く孤立していたのだろう。

羽島での経験とは異なって、関東山地の山村では村人個人から旅の人のことはほとんど広がることがなかった。つまり、山村では地域共同

体が著しく傷つき、崩壊に向かっていたということだ。都会の人々は学者であっても、ムラの人々の深い心の中の傷害、卑屈さ、自閉性を同情や共感をもって知ることもなく、少しも覗き見ることもない。また、著しく変動する多様な自然環境のもとでの、農耕技能・技術の習得は実際には容易ではないのだが、都市民は無知ゆえに、農耕はあたかも簡単な技能と誤解した先入観を持っている。農耕技能の習得にはそれなりの年月が必要であるという事実も正直に述べない。

5. 旅の人と呼ばれて

このところ、The Last Samuraiならぬ The Last Millet の気分である。このくにの人々を支えてきた雑穀を lost crops にしてはならないと40年以上働いてきたが、目先の私欲の果て、いつか見た道への終末時計 23 時 58 分に義憤のやり場がない。混迷を深める時代には一層深く学び、地道に考えることが大事と思う。地方創生と大騒ぎしていても、「辺境」の地道な市民活動にはほとんど関心もたれず、日本の行政政府は何時まで経っても箱モノづくりばかりで、家族農業で必要な、大事な歴史的民具なども捨て去り、いよいよ入るものが溶けて無くなって、ものまね空っぽの田舎になってしまいそうだ。

私は、上述したように45年ほど国内外の村々を経めぐって、雑穀の栽培と調理の調査をしてきた。山村に住んではいないので、村人ではないから「旅の人」と呼ばれる。しかし、調査日数からして実滞在年数は7～8年にはなるだろう。人は旅をして、思いやり深い成人になるのだと思う。しかし、旅をしても何も見ない人もおり、旅をしなくても多くを学ぶ人はいる。また、村に住んでいても多くを見ない人も多いから、何ごとも人の意思によるのだろう。

私も村人になったら、ムラ社会の中で生きるようになったらから、都市的自由を失ったに違いないので、村に頻繁に通うという在り方で良かったと思う。旅人だから、よそ者で一概に悪い人と言われているようではどうもなさそう。いく人かの古老たちからは、村人でもな

いの村のことを思い、いろいろやってくれてありがとうと言われているのだ。それにもかかわらず、村の為政者たちからは恐らく煙たがられているのではないかと感じる。私は特定の村のために農山村の誇りを主張しているのではなく、自然に寄り添う暮らしこそが誇り高く、人間の生活の基層原理だと考えているのだ。古老を敬愛しているのは、彼らが伝統的知識体系や技能を保持しているからだ。ところが、今や村の為政者は古老に敬意をもっていないようだ。

都市はもちろんのこと、山村でも地域でのコミュニケーション^{注7)}が機能せず、コミュニティ^{注8)}が崩壊してきた、この日本の悲しみを強く意識する。意思や意味を持った言葉が重要だが、すでに言霊が重みを失って久しく、言葉の断片やその羅列としての情報データが、個人情報の保護から外れて、ビッグ・データなどとして勝手に売買され、知らない会社の金儲けのために利用されている。いつのまにか平安に暮らす自由が著しく侵害されている。

これまでは公務と並行して、かなりの自費を用いて社会的共通資本を保全し継承する任意公共活動を行ってきた。社会的共通資本には多くの事象が含まれるが、特に私は、自然と農山村の保全、生物文化多様性の継承、環境学習の素材である伝統的知識体系の技能実践、研究普及に大きく関わってきた。市民が、自ら支払った税金からの公金助成に抛らず、任意の私費や寄付により、非営利活動をすることはとても大事で、必要なことだ。行政政府に丸投げの地域保全ではいけない。

しかし、私はもう高齢になったので、職業を持たなくなり、これで社会的義務と責任から大方外れて良いと考えている。もう舞台から降りても良い。否、むしろ引きずり降ろされる前に、降りるべきだろう。余計なお世話の老害やでき

注7：コミュニケーション communication とは社会生活を営む人間の間で行われる知覚・感情・思考の伝達。生物学では、動物個体間での、身振りや音声・匂い等による情報の伝達のこと（広辞苑）。

注8：コミュニティ community とは、同じ地域に居住して利害を共にし、政治・経済・風俗などにおいて深く結びついている人々の集まり、地域共同体（広辞苑）。

もしない過信による年寄りの冷や水はなすまい。将来は若者たちの手や頭で持続したらよい。

6. この醜い国 —親切の対義語とは何か

日本列島の自然や農山村の景観はいまでも美しい。素のままに暮らす山民の心情も美しい。5,000年前の縄文人が使っていた山畑での野良仕事は、冬でも暖かい日差しに、谷から吹き上げる風が快い。鍬一つで耕し、育て、収穫した有機無農薬の穀物、イモ、マメ、野菜を家族・友人に分ち、ともに美味しく食べる。これだけでも私には生きる喜びがある。

都会に出ると、電車中や街路上でも、あまりの不親切に出会って、不愉快になって帰ってることが多い。小路では道を譲りあわない。大道の雑踏の中でも風を切って歩き、直進していく。自転車は逆走してはばかりず、赤信号で止まることもない。電車の中では誰もが無言で、席を奪い、ドア付近に大荷物を置き、乗降の動線を妨げている。車内の移動や乗り降りの際に、無言で体当たりしておきながら、謝りもしない。不快な金属音を漏らしながら、音楽を聴く。ほとんどの人々が、ラインやゲームをしているのか、携帯電話（スマートフォン）の画面にくぎ付けである。

このような異様な行為と景色に、良い年齢になっても、躰のない、無関心の人々が多くいるのかと残念に思う。不躰は若者の専売特許ではなく、人生経験を経たであろう老人にも無教養の人々があまりにも多い。これらは環境も心身も砂漠化した都会の悪い一面だ。都市には面白いこともたくさんあり、都市が創造した表層文化も数多くあり、もちろん全否定しているのではない。しかし、都会において市民の知性と品性が劣悪化し、ストレスが強まるのは悲しいことである。

柳田邦男（2005）は、日本人が壊れていく原因の一つを情報環境の変化に探っている。気になる指摘を次に抜き出しておく。

テレビやテレビゲームはバーチャルリアリティ（仮想現実）の世界だ。社会生活の経験が少なく、情報への批判力もない子供が、毎

日長時間テレビを見たりゲームにふけったりしていると、その子にとっては、仮想現実の世界と現実の世界の区別がつかなくなるばかりか、やがて仮想現実の世界のほうに現実味を感じるという逆転現象が起きてくる。そういう点で先駆的といえる世代が、すでに二十歳代（注：現在では三十歳代）になっている。1960年代から70年代にかけての高度経済成長期には、日本列島の開発と都市化の波の中で、田舎は遅れたところという価値観が一段と支配的になり、それぞれの地域ならではの暮らしや風土の豊かさやそれらを映す方言といったものは、ブルドーザーに押し潰されるような形で否定的にとらえられるようになったのだ。

私には、祖母から地道に生きるための躰として厳しく言われた事どもがたくさんあり、それが私の内気を増長させたのかもしれない。他者の物を取るな。嘘をつくな。食べ物は大事にしる。物を粗末にするな。他者に迷惑をかけるな。新聞に載るようなことをするな。上を見ても、下を見ても限がない、人を羨むな。……実母を2歳で喪って、そのことを20歳まで知らなかった。祖母が私を厳しく育てたのは、実母に成り代わっての責任と温情だったのだろうか。

「親切」の語義は、人情の篤いこと、親しく懇ろなこと、思いやりがあり配慮が行き届いていること、である。それでは、単なる「不親切」ではない対義語は何だろうか。さらに、広辞苑で探ってみた。「冷淡」は、物事に熱心でないこと、同情心のないこと、不親切、とあるので、対義語の一つと言えよう。「非情」は、喜怒哀楽の情がないこと、また人間味や思いやりのないこと。「無情」は、情け心のないこと、情愛のないこと。「無視」は、存在や価値を認めないこと、ないがしろにすること。「卑下」は、卑しめ見下すこと。「平等」は、偏りや差別がなく、すべてのものが一様で等しいこと。「公平」は、偏らず、依怙鬚屑のないこと。

昨今、この国の偉い方々の振る舞いを見ていると、あまりに醜い。日本会議が言いつのる、いかにも「美しい国」とは虚偽の都市伝説であ

る。大元は山縣有朋ら長州軍閥が作った「明治維新」という神話、靖国神社の系譜にある。この件については書くこともいやだが、それを利用しあったのが森友学園の「瑞穂の国小学院」だ。教育勅語を子供に暗誦させることに共感した総理大臣夫人が援助をしたくなるところに付け込み、悪乗りして彼女を利用した理事長夫妻、不公正な便宜を図り、公文書まで書き換えた高級官僚の所業は、青少年の人生観に対して大悪をなし、とても罪が重い。明治維新の醜い権力争いの内情と同じで、嘘をつき通せば、歴史的眞実にすらなるようだ。友人に便宜を図るために、公正さをないがしろにした加計学園の問題も同断だ。靖国神社や日本会議を私利私欲に利用すべく、まつわる人々が右翼・愛国主義と自称するのは、それも表現の自由かもしれぬが、彼らは民族主義者ではなく、ましてや愛国者ではない。明治維新前後から、第二次世界大戦、そして今でも、明治維新の暗黒を生き抜いてきた山縣軍閥の系譜が蠢いているようだ。

いくら鼻根目に見ても、せいぜい官僚が「以心伝心、付度？」により立身出世を図ろうとしたことが、明確な動機だ。文書記録が証拠として出されても、分かっているのに白を切るなど、官僚も政治家も極悪人だ。この事が、どれほどこの国を醜くしているのか、最も地位の高い者たちのなせる悪行、虚偽と隠蔽は、青少年たちに大きな影響を及ぼしたに違いない。公正、正義、道義もない。そんなにまでして、出世したいのか、金権が欲しいのか。政権の私物化、選挙で選ばれていない家族を重要な地位につけて良いのか。公務員は公私の行為を明確にせねばならない。職務上、公的なものを自分に都合の良いように、私してはいけない。ごく当然の倫理ではないか。

私は文部大臣から任命された元国家公務員文部教官教授として厳に慎み、私を公に用いることはしたが、公を私しないように気を付けた。個人、私人、社会人、法人、公人、それぞれのレベルで、大きな責任がある。地位の高い人が責任を取るべきであるのに、直接の作業員／個人の責任に還元するのは間違っている。最終責

任者および社会組織／法人の責任、とりわけ、公的機関・組織としての公務員、公務員特別職の責任を明確にすべきである。

日本国民は多様な民族の集合体だ。日本国籍をもてば、日本人だ。しかし、国籍だけでは日本民族にはならない。当人の自由意思で日本列島に居住し、日本の文化に敬意をもち、学び続けて日本民族の一員に育つことになる。偏狭な自民族中心主義で言っているのではない。自民族に誇りを持たなければ、多様な民族にも敬意を持つことはできないということをお願いしたいのだ。この美しくくにを支えているのは、自然に寄り添って自立して暮らす、誇り高い農山漁村民だ。これらの人々の故に、日本の自然と文化に憧憬を持ってくれた欧米やアジア・アフリカの優れた人たちも少なからずいたのだ。

人間の集団には多くの種類がある。たとえば、現代日本という国民国家には国籍日本人が存在している。国籍日本人は、歴史的に多民族を融合した今日の日本民族が圧倒的多数になっているが、先住縄文人の系譜を継ぐアイヌ民族（約2万3,000人、東京に約5,000人）、ウィルタ民族（約300人）、ニヅフ民族（約5,000人）、琉球民族、小笠原諸島欧米系島民、近現代に移住した朝鮮族、漢族の他にアジア、ヨーロッパ、ラテン・アメリカなどの多くの民族の人々（約225万人、2012）も日本に居住している。人々の集団の定義を整理してみた。

民族とは文化の伝統を共有することによって歴史的に形成され、同属意識をもつ人々の集団。文化の中でも特に言語を共有することが重要視され、また宗教や生業形態が民族的な伝統となることも多い。少数民族は、社会を構成する民族集団のうちで、支配的な民族集団とは異なる言語・宗教・慣習をもち、社会の周縁部や被支配的な地位にある、一般に人口の上でも少数の民族。先住民は、現在住んでいる人々に先だって住んでいる人々。部族は、人種・言語・文化などの特徴を共有し、一定の地域内に住んで同族意識をもつ集団。また、国民は、国家の統治権の下にある人民、国家を構成する人間、国籍を保有する者、国

権に服する地位では国民、国政にあずかる地位では公民または市民と呼ばれる。常民は、普通の人びと、エリートでない人々、平民、庶民とほぼ同義である。個人は、国家または社会集団に対して、それを構成する個々別々の人（広辞苑）。

民族集団 ethnic group とは、同一の文化体系ないしは国民国家のなかで、他の同種の集団との相互行為的状況下であり、接触、反発、同化、融合を繰り返すなかで、相互間の境界はあいまいでありながら、なお自らの伝統的文化を維持し、われわれ意識によって結ばれている人々による集団のことである（世界民族事典 2000）。

ここでは論考に混乱がなきように、基本的には広辞苑の定義に従うことにする。私は雑穀の調査研究のために、国内外の農山村に何百戸もの農家を訪問し、聞き取りをした。雑穀は、minor crop、coarse crop あるいは lost crop と呼びたい人もいるが、決してマイナーな穀物ではなく、今日でもアフロ・ユーラシアの多くの国・地域で主要な食料として、多種の多様な品種がたくさん栽培されている。稲・麦を主穀とする人々が差別的にその他の穀物を「雑穀」と総称しているにすぎない。

雑穀を歴史的に公正に見ると、稲・麦と変わらず、重要な役割を果たしてきた。しかし、偏見によって意図してマイノリティの地位におかれている。少数民族や先住民族という民族集団も、同じようにマイノリティの位置にあるので、両者に感情移入して共感することが多い。雑穀は決して失われた栽培植物ではない。民族、植物、言語、少数者は自ら消滅を宣告せず、暮らしのために、抗い続けてほしい。憐れみを受ける必要はなく、自律して歴史を蓄積した誇りを高くもちたい。民族をつなぐもの、分かちつもの、越えるもの、みな心をつなぐものとして大切だ。多様性を失うことのない歴史事実の尊重を求めたい。

8. 個人主義 — 自由と幸福を求めて

このくにの教育の目的、目標を厳しく問いた

だして、改善すべきだ。学校へ行きたくない児童生徒数、いじめ件数、青少年の自殺件数、突発的な傷害事件、万引きの常態化、教員・教育委員会の隠蔽保身、こうしたことが何十年も続いているのは、学校教育制度と教育の手法や内容に深い問題があるからだ。そこを見つめ直して、改善しなければ、不幸は続く。学びは楽しいし、大切なことだから、学びから逃げだし、考えることを停止するような文明は漸次崩壊に至る。

日本軍の実態を知るにつけても（吉田 2017）、日本の教育の旧弊は日本軍隊のいじめの構造と同じで、敗戦後 70 年を経ても良い方向には未だに変わらない。受験教育で学ぶ楽しみを奪い、人の格付けをする。イリイチが言ったように、学校が選別して落伍者意識を刻印する。たかが有名大学に受験合格しても、それはごく少数の人の人生の始まりに過ぎない。それなりに長く、広い人生には、大勢の人々にもたくさんの可能性がある。学びの機会とその成果は、楽しい人生を過ごすことに向かうべきだ。

いわゆる一般人が誠実に地味に働いても、社会的評価は低い。金銭評価が大方なので、これがすべてだと思ってしまう。無償の行為は金銭的価値がないから、そんな無償の行為は存在しないと思ってしまう。人間として社会的に生きる楽しみ、喜びが金銭にならないとして、否定されてしまう。虚無に陥るしかない。ごく一部のスポーツ選手や芸能人などという人が特別扱いされるいわれはなく、彼ら以外の市民を「一般人」と呼称する尊大さはあまりにも醜い。才能ある人がその才能を大切に花開かせるのは賞賛できるが、才能がなくても努力する人も立派だし、大方、楽しみで芸能やスポーツをする人も、それだけでとても良いのではないのか。見ることも楽しいが、自分でやる方がもっと楽しいものだ。

重ねて問うが、日本の教育は基層のところまで真摯に見直すべきではないのか。不登校、いじめ、自殺があまりにも多く、長年解決に向かっていない。学校教育制度がすべてではない。家庭や地域社会の学びの場こそが重要だが、今日

この国と人々は、学校以外の学びの場をほとんど認めないほどに、学校制度に固着依存している。卒業証書、ライセンスが欲しいだけで、多くを学ばずに、熟練した職人のように技能的な内実をとまなうこともない。いわば金銭で買ったような証書が尊重されるようでは、中身の実力がどれほどに担保・保証されているのか疑わしく、現場で実際に実力を見てみないとわからない。受験教育の成果・資格証書よりも、学習成果の自律した中身を問いたいのだ。

私は東京学芸大学連合大学院博士課程の教育構造論講座（環境教育学研究）担当教授として、環境教育学研究に関して、世俗的には日本の最高権威者^{注9}であった。大学院設置審議会には農学（京都大学農学博士）と教育学で審査を受けて〇合教授に認定され、環境教育学を講じ、博士論文の審査をする資格を得ていた。私は退職に際して、その責任および日本環境教育学会創設者の責任を果たすために、研究のまとめとして同学会誌に「環境学習原論」を提案した。私は植物遺伝学から出発したが、職業的義務からたくさんの教育学古典書を読んで、なかでもイリイチの論に共感し、環境学習専攻として環境学習構造論を提案したのだ。

しかし、日本の教育学者は、教育の構造を根底から考え直した「環境学習原論」には何の関心も持ってくれなかった。他方、日本環境教育学会も、持続的開発論に流され、本質的な環境論も教育論もほとんど論議せずに、また、現場での実践も疎かにし、環境学習理論を正当に扱わず、その結果、環境教育は深い理解がなされず、日本の教育の在り方を良い方向に変える知的な力をもたなかった。

日本の学校制度が、人生を幸せに過ごすための学問を求めているのなら、私たちは制度にのみ依存しないで、自ら師を求めるべきである。人は学校の卒業証書によって何を学んだのかを評価するのではなく、誰の弟子として何を学び、現場で何を実践しているのかを問うべきであろう。私は自ら求めた師たちに学べたことに、個人として高い誇りを持っている。私たちは生長し、幸せな人生を過ごす中で、数多くの先達・

家族・友人に支えられている。それを自覚して、彼らに心より感謝したい。

知を求めることに誇りを失った大学人は、知的価値が金銭経済的価値に従属していることに、羞恥を感じないようだ。大学も証書ビジネスで、結果的には斜陽産業にすぎない。この国では、社会的事業は国庫交付金（税金）に依存し、市民は税金とは別に任意の寄付を、即時的・即自的な見返りのない無償性の社会活動、社会的共通資本に、ましてや大学にはしない。非営利の市民活動は社会・公的な活動であり、原則として自費と任意の会費や寄付で支えるものだが、この国では残念ながら資金難で継続性が低い。一般のNPO法人に寄付しても税金は控除されないし、認定NPO法人になると行政に提出する書類づくりで多くの時間が奪われる。女性方の誤解を恐れず、真意を率直に言うならば、実に怖ろしきは男（権力者）の嫉妬で、無償の活動は阻害されるか、黙殺されてしまう。この嫉妬は男たちが言うように、女（弱者）の専売ではない。行政も大衆社会も、恩（無償性）を仇（無視）で返すのだ。

学問は既成制度としての学校・大学だけではない。本来、学問は自ら今を生きる師を選んで直接教えを受け学ぶか、歴史上の師に私淑して書物から学ぶか、である。さらに、学びの仲間を求めることで大学という学びの場が生まれる。宇井純（1971）が東京大学で意を決して、自主講座「公害原論」を始める時に、開講の言葉を要約すると次のように述べていた。また、本文の中で特に気になったことを引用しておく。私はこの当時、東京教育大学院生で東京大学正門近くの本郷館に住んでいた。この講座を聴講し、水俣病患者らの支援のための学生行動委員会に参加しながら、一方で植物実験に日々を送っていた。

公害の被害者と語るときしばしば問われるものは、現在の科学技術に対する不信であり、憎悪である。個々の公害において、大学

注9：実は誰もそう思わないほどに、残念なことに日本の大学教授には権威はないので、偉ぶって言っているのではない。制度上の事実を述べているのだ。

および大学卒業生はほとんど常に公害の激化を助ける側にまわった。…その対極には、抵抗の拠点としてひそかにたえず建設されたワルシャワ大学がある。そこでは学ぶことは命がけの行為であり、何等特権をもたらしものではなかった。立身出世のためには役立たない学問、そして生きるために必要な学問の一つとして、公害原論が存在する。この講座は、教師と学生の間には本質的な区別はない。修了による特権もない。あるものは、自由な相互批判と、学問の原型への模索のみである。この目標のもとに、多数の参加をよびかける。

ポーランドにおいて大学は占領をうけるたびに常に抵抗の砦であり、占領軍によって大学は取り潰され、教授は銃殺か国外追放になるのは当たり前であった。それでも何年か経つうちには、必ず勉強を目指す学生が夜ひそかに教授の私宅を訪ねて、大学の講義を受け、それがだんだん教室の形をとっていった。いちばん根本にある事象は何かを、われわれが生き残るために必要な学問として、ここで皆さんと一緒に考えていきたい。

いつものことながら、公害においても外国に追従することしかできない日本の知識人のみじめさをつぶさにこの一年見せつけられたことである。環境問題は国際的なトピックスになり、われもわれもと公害について論ずることが一つの流行になったかのような観もある。あたかも自分だけが、対策の総代理店でもあるかのような、これまでの知識人の型と全く変わらぬやり方でしかない。残念ながら、大学アカデミズムの中で、システム化された専門分野に没頭している学者たちは決して公害の現場へ行くこともない。そして、他の専門分野の進歩に期待し、自分の仕事の枠の中だけで公害を論じて、それが生活の資ともなる幸福な状態が今後も続くのであろう。日本でちゃんとした研究ができないというのも、あるいは大学で教えている学問がいつでも目先の展望を追い、目先の理論を次々輸入するからではなかるうかという気がします。専門バカになったとたんに自分の狭い専門が、他

人によって奪われ、あるいは壊されて行くのには耐えられませんから、まず、最初に専門家になった時に約束されることは、お互いに批判をしないということです。専門化された学問は、自分の生活から出たものではありませんから、外国の動きに対していかに遅れずに追いつくか、なんでそういうふうな学問が生まれたかということに全然考えずに、必死になって追及する。外国語ができなければ、学者になれないのです。これは自分の論文を外国語で書くためではなくて、外国語で書かれた論文を読むために、どうしても読めなければ学者になれない。

羽仁五郎も、『都市の論理』の中で、大学の本質について次の要約のように述べている。私はすでに50年も大学に身を置いてきた者として、いずれ大学とは何かについて、別稿で経験的に考察することにしたい。

近代の大学は、自立の都市においてはじめてあらわれたのである。それは元来、市民の組合の一つであり、現に世界の最初の大学であるボロニアの大学は学生の組合が主体であった。パリの大学も教師が市民的組合を形成したものがその母体であった。大学はその成立において、学校が大学と呼ばれたのではなく、その学校に結ばれた学生組合がユニヴェルシタスと呼ばれたのであったことに注目せねばならぬ。ユニヴェルシタスは組合という意味で、学問という意味は全然ない。

大学は封建的教会に対して学問の自立を主張した。大学は本来、治外法権をもっていた。それは都市が封建的な公的権力に対して、これと戦って都市の自治権、都市の司法権を独立させていたように、ボロニア大学などは、封建的司法権力と戦って、大学の司法権を成立させていたのである。この大学の自治権というのは治外法権のことなのである。

これらの大学の学生は、その他の市民の組合と同じく組合結社の自由を有し、武装の自由をもっていた。ヨーロッパの大学の学生は武装権の伝統をもっている。最近の戦争の場合にも、大学の学生が武装している。イタリ

アのレジスタンスなども、そうである。大学は学問するところであるなどというようなオプスキュランティズム {注:反啓蒙主義} では、大学の武装権の意義を理解することはできない。大学は学問の自由を守るために学者および学生が団結する組織である。

学問の自由が守られているならば、大学は武装する必要がない。ソルボンヌの大学その他の多くの大学は元来貧しい学生を主体としていた。裕福な学生は何も組合を作る必要はなく、個人教授を受ければよい。大学は学問の自由に関連して学生の経済的条件のための組織でもあった。高い授業料を取ることは大学の本質に反する。大学は元来一つの内的欲求から生まれたもので、上からの手によって創られたものではなかった。自立の都市こそが国民の学問および芸術を創り出したのだ。公共のための図書館にしてもそうである。

日本の国立大学は国家のために働く若者を養成するために、国家が創ったもので、ヨーロッパの原初的な大学の出自とは大きく違っている。理屈上の大学の自治ではないにしても、憲法で保証されている学問の自由を、自ら心して守る活動の蓄積を求めたい。

私は原初的な大学を追体験したいと考えて、ささやかに「日本村塾 Nihonmura College for Environment Studies」を始めた。宇井純の自主講座「公害原論」の開講の趣旨と同じではあるが、制度としての大学に依拠しないで、共に自ら学ぼうと集まる人々は少ない。当時の学生・市民の熱気のように、堅固に制度化された大学や受験教育の全面否定をするわけではないが、もっと自由な学びの場が学校制度の枠外にもあってよいと、強く思うのである。

宇沢 (2008) は、宇井を追悼して次のように述べている。私も若い人々に思いを託したい。

宇井が、その生涯を通じて最も嫌悪し、闘ってきた、人間としての最低の生きざまである。その市場原理主義が、小泉政権の五年有余の間に、日本に全面的に輸入され、社会の非倫理化、社会的紐帯の解体、文化の俗悪化、そして人間的関係自体の崩壊をもたらした。こ

の危機的状況の下で、宇井純を失うことの損失は大きい。痛恨の情を抑えきれない。しかし、彼は、高い志を守りつづけて、崇高な一生を送った。彼の志を継いで、日本をもっと人間的、自然的、社会的に魅力のあるものに変えてゆくために力を惜しまない若者が必ずや数多く出るに違いない。

9. パンドーラーの壺 — 希望を探して

このくにの人々は自然に寄り添う信仰を失いつつあり、金権にばかり服し、これをまるで神でもあるかのように拝むようになった。それが不幸の根源だ。根底にある大事な物事を探り、変曲点を自律的に動かなくてはならない。悲惨の繰り返しはしない。金権に服せず、自然を信仰する。この国が小汚く不幸なら、それでも私たちは素のままの美しい暮らしで幸せに過ごそう。基層文化を大切に継承し、学ばなら、真文明への移行はできるかもしれない。

人間の文明はますます野蛮へと退行し、その醜さは滅亡へと向かわせる。それでも美しいものを求めて、刻苦奮闘してきた人々はいた。絶望の彼方、未来の北の川^{注10}に、希望を託そう。行きつ戻りつではあるが、明らかに人間の教養(思いやりの知性)は少しずつ高くなってきている。また、絶望のさ中でも、子供たちは新しく生まれ続けている。どんなに絶望しても、希望を探し求めるしかないではないか。

パンドーラーはギリシャの神々により、人類に災いをもたらすために、地上に送り込まれた人類最初の女性である。とはいえかつては美しい地母神で、地下から恵みをもたらす豊穡の神であった。神々が彼女に決して開けてはならないと言って与えた甕を、彼女が好奇心に負けて開けたところ、さまざまな禍が飛び出した。甕に唯一残ったのは希望で、せめて人間は希望を求めて生き続けることになってしまった (Wikipedia 2018.4.5)。

注10: 未来の北の川はP. ツランの詩の一節、ケイリー (2005) は、「期待は明日を無理強いする。希望は現在を押し広げて、未来を作る。未来の北方に。」という暗喩として引用している。

期待は他者への求め、願いであって、自らが実行し、実現できることではない。希望は自らの意思で、自らが行為し、実現を求めることである。他者への期待は心満たされることが不定だが、自らの希望は心満たすためになくてはならないことだ。パンドーラーの甕に残された希望も、罪なことに実現を保証するものではないが、人は希望を求めずして生きることができない。

現代を生きる人々を取り囲む虚無の暗い闇も、便利の眩い輝きも、ともに人々の視覚を奪うものだ。それでも、楽しく幸せに生きるには希望を探し続けるしかない。幸福の青い鳥は自己を取り巻く身近なところにある。家族、師友、隣人に親しみたい。さらに、自己は教養を高め、信仰を深め、意思を強めることによって、時空間を越えて広く、優れた先人にも親炙あるいは私淑して、学び、信じ、考えることはできる。自ら希望を求め、見失わない限り、人々は来世に期待せずとも、現世を何とか生きていける。カリユグ、黙示録の時代の終末、いつか来る最後の審判の日、その後の真文明の時代に向けて、先真文明時代の人間として真摯に努力した人々の自律心の遺跡を残しておきたい。

文献

- ケイリー、Cayley, D. 2005. The Rivers North of the Future, The Testament of Ivan Illich, 1926-200, ed. by Cayley, D., House of Anansi Press, Inc., Toront. 白井隆一郎訳 2006、生きる希望—イバン・イリイチの遺言、藤原書店。
- 羽仁五郎 1968、都市の論理、勁草書房。
- アンリ、Henry, M. 1987、山形順洋・望月太郎訳 1990、野蠻—科学主義の独裁と文化の危機、法政大学出版局。
- 木俣美樹男 1970、農業と人口、人間の未来—一次の世代の環境について、生物科「なかよし」増刊号：2-5。
www.milletimplic.net/essey/futurehuman.pdf/
- 木俣美樹男 2014、先真文明時代への覚書、民族植物学ノオト第7号：29-37。
- 木俣美樹男 2015、生きるという任意・自律的な営為を動かす心情の省察、民族植物学ノオト第8号：23-66。
- ラスキン、Raskin, J. 1862、飯塚一郎・木村正身訳 2008、この最後の者にも、ごまとゆり、中央公論社。
- テイラー、Taylor, G.R. 1968、渡辺格・大川節夫訳 1969、

- 人間に未来はあるか—爆発寸前の生物学、みすず書房 [The Biological Time-bomb, Thames and Hudson, London]。
- テイラー、Taylor, G.R. 1970、大川節夫訳 1971、続・人間に未来はあるか—最後の審判、みすず書房 [The Doomsday Book, Thames and Hudson, London]。
- ゴッホ、Van Goch, V. 1872-1890、二見史郎編訳・関府寺司訳 2001、ファン・ゴッホの手紙、みすず書房。
- 内田樹・藤山浩・宇根豊・平川克美 2018、「農業を株式会社化する」という無理—これからの農業論、家の光協会。
- 宇井純 1971、公害原論 I・II・III、亜紀書房。
- 宇沢弘文・内橋克人 2009、始まっている未来—新しい経済学は可能か、岩波書店。
- 山口晶（木俣美樹男）1971、生物科学と思想性、生物科学研究会誌 Vol.I：1-4、静岡大学生物科学研究会。
www.milletimplic.net/essey/essey.html
- 山折哲雄監修 1991、世界宗教大事典、平凡社。
- 柳田邦男 2005、壊れる日本人—ケータイ・ネット依存症への告別、新潮社。
- 吉田裕 2017、日本軍兵士—アジア・太平洋戦争の現実、中央公論新社。